主題を追求し実現することができる生徒を育む美術科の授業

Ⅰ　はじめに

グローバル化が進み，価値観が多様化するこれからの時代において，生徒たちが直面していく問題はより複雑なものとなる。そのような問題を解決していくためには，固定観念に捕らわれず，どのように新たな価値を生み出していくかということが重要となってくる。

そのような中，美術科は表現及び鑑賞の幅広い活動を通して，自分としての意味や価値をつくりだすことができる教科であると言える。そして，自分としての意味や価値をつくりだしていくためには，表現において「上手」か「下手」かといった一様な価値観で制作するのではなく，生徒が自ら強く表したいことを心の中に思い描き，生み出した主題[注1)]を追求して実現することが大切であると考える。このことは，学習指導要領において，主体的で創造的な表現の学習を重視するため，「Ａ表現」の発想や構想に関する全ての事項に「主題を生み出すこと」が位置付けられたことからも言えることである。そして，「Ｂ鑑賞」についても，「『Ａ表現』及び『Ｂ鑑賞』の指導については相互に関連を図り，特に発想や構想に関わる資質・能力と鑑賞に関する資質・能力とを総合的に働かせて学習を深められるようにすること」[2)]とあることから，主題を追求し実現していくためには，自他の作品を主題を意識して鑑賞させ，表現を振り返らせながら制作させていくことも必要だと考える。

前研究シリーズ「創造的な技能を発揮し，思いを形にすることができる子どもの育成」においては，「基礎的な技能」[注2)]に着目し，主題を表すために「基礎的な技能」を工夫させることに重点を置いた研究を行った。それにより「基礎的な技能」を基に，発想したアイデアを批判的思考を用いて見直し，構想させていくことで，生徒たちが作品をよりよいものに変容させていく姿が見られた。しかし，技能を重視する余り，主題への意識が薄れてしまい，写実的な表現に偏ってしまうことがあった。そのため，「主題をどのように表現したらよいか」ということを深く考えながら表現させるところまでは至らなかった。

以上のことから，基礎的な知識・技能を習得させることを引き続き大切にしながらも，常に主題を意識しながら発想し構想を練るとともに，作品を制作していくことを通して，主題を追求し実現することができるようにさせていきたいと考えた。

そこで，本研究シリーズでは研究主題を「主題を追求し実現することができる生徒を育む美術科の授業」と設定した。

Ⅱ　研究の概要

１　美術科が目指す生徒像

本校美術科では，次のような生徒を育てたいと考えている。

主題を追求し実現することができる生徒

「主題を追求し実現する」とは，生み出した主題を基に，発想し構想を練り，表現方法を創意工夫し，創造的に表していくことである。主題を追求し実現するためには，表現するための基礎的な

知識・技能を習得させるとともに，発想し構想を練り，作品を制作していく過程において，常に主題を意識させ，表現を振り返らせながら表現をさせていく必要がある。

2　育みたい資質・能力

美術科で目指す生徒を育てるためには，次の資質・能力を育む必要があると考える。

○　主題を基に，発想し構想を練る力
○　主題を基に，創造的に表す力

「主題を基に，発想し構想を練る力」とは，生み出した主題を基に，基礎的な知識・技能を活用して，自己の表したいことを重視したり，目的や機能を踏まえたりしながら豊かに発想し構想を練る力のことである。また，「主題を基に，創造的に表す力」とは，生み出した主題を表現するために，基礎的な知識・技能を活用して，材料や用具などをいかし，表現を振り返りながら見通しをもって表す力のことである。学習指導要領に「表現の学習では，発想や構想に関する資質・能力と創造的に表す技能とが相互に関連し合いながら育成されていくものであり，両者が関連しあって初めて，創造的な表現が可能になるのである。」[3)] とあり，二つの力を相互に関連させ合いながら育成していくことが大切である。

3　資質・能力を育むための手立て

(1) 三つの場の設定

題材の流れの中に「つかむ場」「追求する場」「ふりかえる場」という三つの場を設定することで，拡散的思考と収束的思考を適切に働かせながら，知識・技能を段階的に習得させ，資質・能力を育んでいく。

「つかむ場」は，本題材がどのようなものなのかをつかませ，主題を生み出させたり，「工夫ポイント」[注3)]を学ばせたりする場である。まず，本題材のねらいや条件を伝えたり，必要に応じて参考作品を鑑賞させたりすることで，どのような題材かを把握させる。そこから自らが感じ取ったことや考えたこと，作品制作の目的や条件などを基に，「何を表したいのか，何をつくりたいのか，どういう思いで表現しようとしているのか」など，強く表したいことを心の中に思い描かせ，生み出させた主題をワークシートに記述させる。また，「工夫ポイント」を学ばせるために，「工夫ポイント」が意識できる参考作品を鑑賞させ，その効果や特性についてグループで意見交換させたり，「工夫ポイント」を意識して簡単な表現をさせたりする。

「追求する場」では，生み出した主題を基に発想し構想を練るアイデアスケッチや試作と，材料や用具などをいかして作品を制作する本制作を行わせていく。この場を後述の拡散的思考と収束的思考を働かせる場面として位置付ける。生み出した主題を基に，「工夫ポイント」を活用させながら，複数のアイデアスケッチや試作を発想させる。そこから，発想されたアイデアスケッチや試作を基に，中間鑑賞会を行い，主題が「工夫ポイント」を活用して表現されているかを中心に意見交換させる。その後，中間鑑賞会を通して伝えられた意見や気付いたことを基にアイデアの最終版の構想を練らせる。そして，その後の本制作では，主題を表すために材料や用具をいかし，表現を振り返りながら見通しをもって作品を制作させていく。表現を振り返りながら見通しをもちやすくするために，小グループの隊形で制作をさせ，いつでも互いの作品の鑑賞や，意見交換をできるようにさせる。

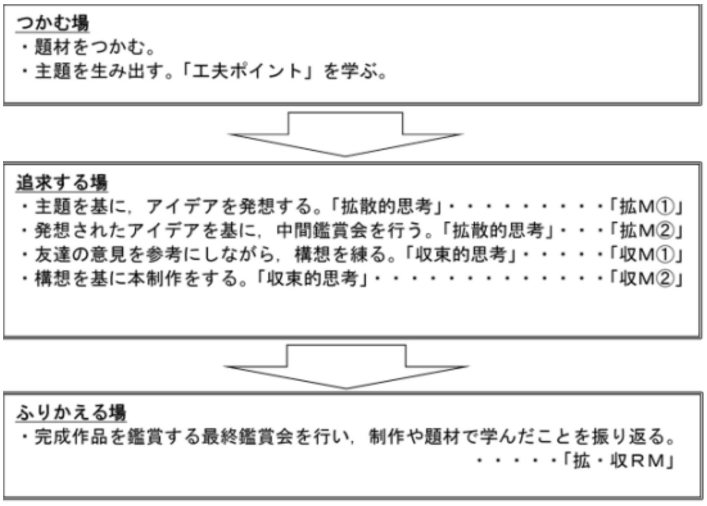
「ふりかえる場」では，本制作をして完成した自他の作品を鑑賞させる最終鑑賞会を行い，

主題を表すために「工夫ポイント」を活用していくことがどのように効果的だったかを考えさせたり，題材全体の学びを振り返らせたりする。

このように題材全体を通して「工夫ポイント」を活用させていくことで，深い理解を伴った知識・技能を習得し，資質・能力が育まれていくと考える。

(2) 拡散的思考と収束的思考を働かせる場面の設定とメタ認知

「追求する場」に拡散的思考と収束的思考を働かせる場面を設定することで，発想や構想，本制作が，より主題を表すものになったり，「工夫ポイント」が活用されたものになったりすると考える。また，拡散的思考と収束的思考を適切に働かせたり，「工夫ポイント」への理解を深めたりするためのメタ認知の促進として「拡散的思考中のモニタリング①②」《以下「拡M①②」》「収束的思考中のモニタリング①②」《以下「収M①②」》「拡散・収束的思考による課題解決後のリフレクション・モニタリング」《以下「拡・収ＲＭ」》を行わせる。



【題材の流れ】

拡散的思考を働かせる場面では，生み出した主題を基に，「工夫ポイント」を活用させながら，複数のアイデアスケッチや試作を発想させ，それを基に意見交換をさせる中間鑑賞会を行う。発想時に，拡散的思考を適切に働かせるためのメタ認知の促進として，発想の途中で参考作品などを示し，「工夫ポイント」の活用の仕方に気付かせた上で，活用の仕方を変えて複数のアイデアを考えることができているかを問い掛けることで，新たなアイデアスケッチや試作を発想することができるようにさせていく。また，「工夫ポイント」を活用しているか確認させながら発想させていくために，アイデアスケッチや試作に，主題を表すために「工夫ポイント」をどのように活用しているかをワークシートに記述させ，それを振り返らせながら表現の見通しをもたせていく（「拡M①」）。その後，中間鑑賞会でアイデアスケッチや試作を基に，主題が「工夫ポイント」を活用して表現されているかなどを意見交換させ，ワークシートや付箋紙に記述する活動を行わせる。話し合いや，ワークシートや付箋紙に書かれた記述から，「工夫ポイント」の新たな活用の仕方に気付かせ，参考になりそうなアイデアを見付けていく（「拡M②」）。

次に，収束的思考を働かせる場面として，アイデアの最終版の構想を練らせ，材料や用具をいかして本制作をさせる。構想時に，収束的思考を適切に働かせるためのメタ認知の促進として，中間鑑賞での友達の意見や気付いたことを，どのように取り入れるかを取捨選択するように促した上で，アイデアスケッチや試作を見直させていくことで，より主題が表れるアイデアの最終版の構想を練ることができるようにさせていく。また，「工夫ポイント」を活用しているか確認させながら構想をさせていくために，アイデアの最終版に，主題を表すために「工夫ポイント」をどのように活用しているかをワークシートに記述させ，それを振り返らせながら表現の見通しをもたせていく（「収M①」）。そこから，本制作時に，収束的思考を適切に働かせるためのメタ認知の促進として，制作途中に友達の作品の鑑賞を促し，主題を表すための「工夫ポイント」の活用の仕方や，材料や用具のいかし方などを見付けさせ，それを基に表現を振り返らせながら見通しをもって表現さ

せていく。また，「工夫ポイント」を活用しているか確認させながら制作をさせていくために，本制作の作品に，主題を表すために「工夫ポイント」をどのように活用しているかをワークシートに記述させ，それを振り返らせながら表現の見通しをもたせていく（「収M②」）。そうすることで，作品が主題を表現するために，「工夫ポイント」が活用されたものになるようにしていく。

「ふりかえる場」において，題材全体を振り返らせ，主題を表すために「工夫ポイント」を活用していくことがどのように効果的だったかを考えさせ，それが他のどのような場面でいかせそうかをワークシートに記述させる。また，主題を追求していくに当たって，アイデアスケッチや試作を複数発想したこと，中間鑑賞会での意見交換を参考に構想を練ったこと，主題を表すために「工夫ポイント」がどのように活用されているかを振り返りながら本制作をしたことが，主題を実現することにつながったかをワークシートに記述させる（「拡・収ＲＭ」）。

４　資質・能力が育まれたかの評価について

「主題を基に，発想し構想を練る力」については，「追求する場」において，生み出した主題を基に「工夫ポイント」を活用して豊かに発想し構想を練ることができたかについてワークシートから評価する。「主題を基に，創造的に表す力」については，「追求する場」において，生み出した主題を表現するために，「工夫ポイント」を活用して，材料や用具などをいかし，表現を振り返りながら見通しをもって表すことができたかについてワークシートや作品から評価する。

５　研究の経緯

１年次において，拡散的思考と収束的思考を働かせる場面の設定について，発想し構想を練るところで，複数のアイデアスケッチや試作をつくらせ，中間鑑賞後に最終的なアイデアを決定させていく形にしたことで，アイデアスケッチや試作をよりよいものに変容させていくことにつなげていくことができた。そしてそれは作品に主題がより表れることにもつながったと考える。しかし，アイデアを発想させる際のワークシートが，発想を十分に広げられる形になっていなかったため，効果的に拡散的思考を働かせることができなかった。また，拡散的思考と収束的思考を適切に働かせるための「モニタリング」の方法が，メタ認知を促すための声かけをするという形であったが，生徒たちに伝わりづらい部分があったため，メタ認知を促す手段として有効ではなかった。

そこで，２年次では，アイデアを発想させる際のワークシートの枠組みを，発想を広げやすい形にした。そして，拡散的思考や収束的思考を働かせる場面における「モニタリング」の方法を，参考作品や友達の意見などを基に新たな視点を与えた上で，声かけをするなどより具体的にしていくことで，よりよい発想や構想ができるようにさせた。また，「リフレクション・モニタリング」についても，学んだ「工夫ポイント」が「他のどのような場面で生かせそうか」という問いを加えることで，より理解を深めることにつなげていくことができた。しかし，講じた手立ての有効性に個人差があり，特に美術に苦手意識がある生徒がアイデアスケッチの時点でつまづくことが多かった。これは，「工夫ポイント」を活用して複数のアイデアを考えられていないことが原因であり，手立ての有効性を高める工夫が必要であると考えた。

３年次では，拡散的思考を働かせる場面における中間鑑賞会において，友達から意見をもらうだけでなく，参考になりそうなアイデアを見付ける活動を加えることで，中間鑑賞会の活動でより思考が拡散できるようにしていった。そうすることで，アイデアを発想することが苦手な生徒が友達のアイデアスケッチの鑑賞から自分のアイデアに取り入れられそうなものを見付ける姿が見られた。そのことから，苦手意識がある生徒でも，拡散的思考がより適切に働くようになったと考える。そして，中間鑑賞会が充実したことで，その後の構想を練る場面においても，友達の意見や見

付けたことをどのように取り入れるかを取捨選択し，アイデアスケッチや試作を見直していく活動（「収M①」）を行う際の判断材料が増え，より収束的思考が適切に働くことにもつながった。

Ⅲ　おわりに

本研究では，「主題を追求し実現することができる生徒」を育てるため，「三つの場の設定」「拡散的思考と収束的思考を働かせる場面の設定とメタ認知」を手立てとして，「主題を基に，発想し構想を練る力」「主題を基に，創造的に表す力」を育んできた。

拡散的思考と収束的思考を適切に働かせることを含めた手立てを設定したことで，生徒たちが試作やアイデアスケッチ，そして作品の制作において，主題を表すために「工夫ポイント」をどのように活用しているかを振り返りながら表現していく姿が，活動の様子，ワークシートや作品が変容していく様子から見て取れた。このことからも，表現するための基礎的な知識・技能を習得させるとともに，発想し構想を練り，作品を制作していく過程において，常に主題を意識させ，表現を振り返らせながら表現をさせていくことが，主題を追求し実現することにつながったと考える。今後も，主題を追求し実現することができる生徒を育んでいくとともに，新たな研究につなげていきたい。

注1)「自分は何を表したいのか，何をつくりたいのか，どういう思いで表現しようとしているのか」など，強く表したいこと。

注2)「基礎的な技能」の「技能」には知識も含まれるものとする。

注3)「工夫ポイント」とは，主題を表す上で題材に応じて意識させたい基礎的な知識・技能として教師が設定するものであり，形や色彩，光，材料，技法などの造形の要素を含むものとする。

引用文献

1）文部科学省『中学校学習指導要領解説　美術編』日本文教出版, 2017年, p10

2）文部科学省『中学校学習指導要領解説　美術編』日本文教出版, 2017年, p118

3）文部科学省『中学校学習指導要領解説　美術編』日本文教出版, 2017年, p14

参考文献

文部科学省『中学校学習指導要領解説　美術編』日本文教出版, 2017年

阿部宏行『図工・美術がもっと好きになる「造形のＡＢＣ」』日本文教出版，2015年

大橋功『美術教育概論（改訂版）』日本文教出版，2011年

鈴木淳子・前田基成『美術科教育の理論と実際』日本文教出版，2015年

若元澄男『図画工作・美術科　重要語句300の基礎知識』明治図書，2017年

奥村高明『マナビズム』東洋館出版，2018年